

今日の福音も先週に続いて、そのご生涯の最後にエルサレムの神殿に立たれたイエスが語られたみことばを伝えています。これらのみことばは、エルサレムの神殿の祭司長や、エルサレムの最高法院の議員であるユダヤの長老たちに向けて語られたことばです。先週もお話したことですが、イエスがここで相手にしているのは、当時のユダヤの社会の実質的な最高権威者たちです。政治的にはローマ帝国の支配下に置かれていても、エルサレムの神殿を拠りどころとするこの人々の宗教的権威はいささかも揺らぐことはなかったのです。エルサレムの神殿こそが、政治的独立を失って久しい、ユダヤの民の民族としてのアイデンティティーの拠りどころであったからです。

エルサレムから遠く離れたガリラヤの地で福音宣教を開始されたイエスは、従って来た人々を引き連れて、そのエルサレムの神殿の境内に立たれたのです。イエスに従って来た人々は熱狂的な歓呼をもってイエスのエルサレム入りを祝いました。ロバに乗ってエルサレムの町に入るイエスの姿の中に、旧約の預言者が告げていたことの実現を重ね合わせて見る事が出来たからです。メシアはそのような姿でエルサレムに来られることを預言者は告げていたのです。

神殿の境内に入られたイエスは、いけにえのための動物の取引をしていた商人たちや、ローマ帝国内で流通していた貨幣を、神殿域内の貨幣に両替していた両替商を力づくで追い払われ、公然と人々に教えを宣べ始められます。イエスのそのような行為は、祭司長や長老たちといったユダヤの最高権威者たちとの対立を決定的なものとなし得なかつたのです。

先週の日曜日の福音と今日の福音に語られているたとえ話は、もはや、たとえ話という、どこかのどかな感じのするものではなく、その時代のユダヤの指導者たちが拠って立つ権威そのものに対するイエスのあからさまな、痛烈な批判のことばです。そこには、イエスの側からのそれまでのユダヤの宗教性に対するあからさまな挑戦が込められているのです。

イエスは何故、あのような行動を取られ、このようなことばを発せられたのでしょうか。イエスにとってはそれが、その時代のユダヤの人々に対する神からの警告であったからです。旧約の預言者たちも、神が求めておられる社会正義の実現をなおざりにして、祭儀に頼るイスラエルの民の生き方に痛烈な批判を浴びせています。それが、預言者たちに託された神からの警告であったからです。

今日の第一朗読のイザヤの預言にあるように、ぶどう園はイスラエルの家、

ユダの人々です。イスラエルの民を約束の地に導き入れられた主である神は、そこに、エジプトから導き出された人々を住ませ、ご自分のぶどう園を造られたのです。それは収穫の実りを期待してのことです。主である神が期待された実りとは、神のさばき、すなわち神の御心に沿った正義の実現です。けれども、実ったのは神が期待されたのとはほど遠い、酸っぱいぶどうばかりであったと言われています。神の悲憤のことばです。神の民であるとの自負とは裏腹に、人々の間には神の御心としての正義を踏みにじった争いと、その結果としての流血騒ぎが後を絶たなかったからです。力ある者たちに踏みにじられた弱い立場の人々の上げる叫びが、主のぶどう園であるべきイスラエルの地には満ち満ちていたからです。イザヤのことばはそのようなイスラエルの民に対する神の怒りのさばきとしての捕囚に対する警告だったのです。

今日の福音のぶどう園の主人と農夫たちのイエスのたとえ話は、このような旧約の預言者たちの警告を引き継ぎ、イスラエルの民の指導者たちによって無視され続けてきた、その神からの警告がたどり着いた最終地点を示しているのです。

そして、イエスの時代のイスラエルの指導者たちは、イエスが語られたとおりに、ぶどう園の主人である神が最後に遣したその息子を、ぶどう園の外に追いやって殺してしまうのです。このたとえを語られたイエスは、ご自分の運命を予見しつつ、ぶどう園の主人である神が求めておられる収穫の実りを求め続けられるのです。ぶどう園の主人である神から遣わされたその息子のことばを受け入れ、ふさわしい収穫の実りを、ぶどう園の主人に返すように求め続けているのです。そのことに自分のいのちをかけているのです。

けれども、この後の福音書の経過が示すように、ついに、最後に遣わされたこの息子の要求は聴き入れられることなく、その息子はぶどう園の外に追いやられ、異邦人の手によって十字架にかけられて殺されてしまうのです。こうして旧約聖書に語られてきたイスラエルの民が担ってきた神の民の歴史は閉じられたのです。そのことによって旧約は終わったのです。エルサレムの神殿でさげられていた動物のいけにえによる神への礼拝の時代は幕を閉じたのです。

けれども、創造主である神の救いの御計画は、人間の側からの如何なる反抗によっても挫折することはありません。神がこの世界に遣わされたその御子イエスの十字架の死は、それまでの全てのいけにえが果たしえなかった、神と人間との間の真の契約のいけにえとして、新たな神の民を生み出したのです。主である神と神の民がともに住む家を建てるはずであったイスラエルの指導者たちによって捨てられた石、イエスを隅の親石として、新しい神の民の家である教会が立てられたのです。今日の福音の最後に引用されている詩篇のことばは、イエスを隅の親石として立てられた教会において、このような意味で理解され

ているのです。

イエスがあの時代のユダヤの指導者たちに向って、そのいのちをかけて語られた最後のメッセージから、私たちは何を受け取るべきでしょうか。イエスがそのために遣わされたのは、父なる神が求めておられる神の御心に沿った正義の実現です。全ての人が神の民の一員として平和に生きることが出来る正義の実現です。そしてそれは、弱い立場におかれている人々の叫びに耳を傾け、その人々の願いを自分の願いとする、イエスが示された愛によって実現される、神が求めておられる正義の実現です。イエスの十字架の死によって生み出された新しい神の民の一員として、私たちもイエスがそのいのちをささげた、この神の求めに応じてゆく決意を新たにし、その道を歩む恵みを願って今日のミサをおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高